人権コラム「きずな」7月号

「思い出深い一年だったよ」と言うために

大阪教育大学　岡田耕治

コロナ禍は、ことに宿泊業や飲食業を営む人へ厳しくのしかかっている。もちろんそれ以外の業種の方々にも、様々な影響が出ているだろう。私は、長らく小・中学校に勤めていたので、学校の教職員が大変な毎日を送っていると想像することができる。中でも一番つらいのは、子どもたちの顔を見ることができないということではなかろうか。給食が一日のうちで一番バランスの良い食事だという子ども、家族のごたごたが続き家に帰るのがつらいという子ども、絶えず声をかけて励ますことによって学びにつながろうとする子ども、そんな子どもたちとたくさん出会ってきた。今も同じような情況におかれた子どもたちがいるにちがいないが、教職員はその子どもたちと顔を合わすことすらできなかった。

五月二六日の朝日新聞朝刊、大阪府の小学校教員の次のような投書が目に止まった。投書では、担任する６年生の子どもたちの状況を心配した上で、〈分散登校で学習課題の提示や学びの状況の確認を進めるが、「主体的・対話的で深い学び」は、感染拡大の飛沫感染対策を実施しながらでは困難といわざるを得ない。また、運動会や修学旅行、校外学習など小学校の大切な思い出作りにも苦心している〉とし、最後にこう結んでいる。〈いろいろあったけど思い出深い１年だったよ」と喜び合える日をめざし、柔軟にかつ責任をもって取り組むつもりだ。〉

本学では、現在基本的にオンラインで授業を進めている。私が担当している「学校の役割と経営」という授業は、オンライン授業でも一方的に課題を提示するのではなく、学生たちが考えたことを拾い上げたり、現在学校で起こっている問題を投げかけたりする形ですすめている。そこで、この投書を取り上げて、次のような課題を出した。〈どうすれば感染予防をしながら運動会や修学旅行など、子どもたちの大切な思い出づくりが実現できるか？〉と。これから教職をめざす学生に、是非考えて欲しい課題だった。

運動会は、種目数を減らし短時間で終わるようにしたり、来客を保護者のみに限定したりする。修学旅行は日程を減らし、行動範囲を限定して実施する。映像を使ってクラスで一つの作品をつくってはどうか。コロナ対策の制限を子どもたちに示して、子どもたちとともに新しい行事を考えて行くのはどうか。など様々なアイデアが出る中で、「缶けり」や「電子レンジの玉子実験」など、とても小さなことを提案として書いている学生がいた。例えば、「缶けり」については、こんなふうに書いている。

〈私が小学校６年生の時、担任の先生たちが放課後に先生と何か遊びをするということを企画してくれたことがあります。その時は、参加者は五〇人ぐらいで校舎内や車の出入りがある駐車場などを除いた学校の敷地内すべてを使って缶けりをすることになりました。鬼は運動神経の良い先生二人が担当してくれたので、私たち児童はとてもテンションが上がりました。果敢に缶をけりに行く者や物陰にじっと隠れる者など様々いましたが、先生たちが全力で私たちと遊んでくれたので、あの缶けりはとても思い出に残っています。先生たちが今の環境でできることを最大限に活かし、子どもたちが楽しめる企画を実施することができれば、児童たちにとって特別な思い出になるのではないかと思います。〉

私は、これらの学生の提案を読んで、なんとか運動会を、どうすれば修学旅行が、という発想に縛られていたことに気づかされた。子どもたちの記憶に残るのは、どんな行事かではなく、それを企画する先生方の熱意であり、真剣に缶けりをする友だちの表情であるのだと。コロナ禍の中、子どもたちの笑顔のために、私たちが出来ることはたくさんありそうだ。